兵庫の きのこ 図鑑

兵庫で見られるきのこ

兵庫のきのこ図鑑

社団法人 兵庫県治山林道協会

兵庫の きのこ 図鑑

兵庫で見られるきのこ

2012年6月

社団法人 兵庫県治山林道協会

はじめに

兵庫県の森林面積は561千haで県土の約7割を占めています。日本海側から太平洋岸まで、また標高1510mの氷ノ山から海岸部まで、多種多様な森林に覆われており、ブナやミズナラ、コナラ、スギ・ヒノキ、アカマツ・クロマツなど多くの樹木を見ることができます。普段私たちは、樹木や植物にばかり目が行きますが、地表部や枯れ木の上を注意深く見てみると、色々なキノコがひっそりと生活しているのがわかります。中にはキノコと思えないような変わった形のものも目にすることができ、案外どこにでもいろいろなキノコが発生していることに気づきます。

しかし、私たちが普通に目にしているのは、彼らの身体のうちのほんの一部分で、身体のほとんどは、土壌や枯れ木の中に菌糸の状態で広がっており、キノコは、地球上で最大の生物だとも言われています。

森林の中で発生する主なキノコは、地表の生きた木と助け合って生活するキノコ（菌根菌）、木材を腐らせて生活するキノコ（木材腐朽菌）、落ち葉・木の実・動物の死骸やフンを腐らせて生活するキノコ（落ち葉分解菌）の三つのタイプがあります。

これらの働きにより有機物の分解を進め、土壌中の動物がそれを食べることにより、養分が豊富な森の土を作ることができます。もし、キノコやカビが存在しなければ、木や植物が育つ豊かな森を作ることはできません。

この『兵庫のきのこ図鑑』は、兵庫県内に発生するキノコを紹介するために、兵庫県林業会議発行の『兵庫の林業』に2005年4月から2012年1月まで7年間28回に渡って連載されたものをとりまとめたものです。兵庫県の多様な森林はキノコにとっても非常に恵まれた環境で、多様なキノコ相が広がっています。色とりどりの、様々な形態のキノコの世界を少しでも知っていただき、キノコを通じて兵庫県の森林の豊かさを理解していただければと願っています。

2012年6月

社団法人　兵庫県治山林道協会長
宍粟市長　　田路　勝

目　次

●きのことは 1
●きのこの役割 2
●きのこの一生 3
●きのこの分類 3
●きのこの観察のポイント 5

●兵庫のきのこ
キヒラタケ 7
トキイロヒラタケ 7
ヒラタケ 7
ウスヒラタケ 8
マツオウジ 8
シイタケ 8
ホンシメジ 9
シャカシメジ 9
ヤグラタケ 9
ウラムラサキ 10
ツキヨタケ 10
ムラサキシメジ 10
サマツモドキ 11
キシメジ 11
マツタケ 11
ニセマツタケ 11
ナラタケ 12
ナラタケモドキ 12
オオイチョウタケ 12
スギヒラタケ 12
ムキタケ 13
フチドリツエタケ 13
チシオタケ 13
ヒメカバイロタケ 14
ダイダイガサ 14
イボテングタケ 14
タマゴタケ 15
タマゴタケモドキ 15
クロタマゴテングタケ 15
カブラテングタケ 16
シロオニタケ 16
ハイカグラテングタケ 16
ヒメベニテングタケ 17
ドクツルタケ 17
ニオイドクツルタケ 17
ササクレシロオニタケ 18
オオオニテングタケ 18
ツルタケ 18
ヨソオイツルタケ 19
ミヤマタマゴタケ 19
ハイイロオニタケ 19
シロテングタケ 20
フクロツルタケ 20
コトヒラシロテングタケ 20
コシロオニタケ 21
キヌオオフクロタケ 21
ヒイロベニヒダタケ 21
オオシロカラカサタケ 22
カラカサタケ 22
ウスキモリノカサ 22
コガネタケ 23
イヌセンボンタケ 23
ムジナタケ 23
ヤナギマツタケ 24
モエギタケ 24
クリタケ 24
ニガクリタケ 25
ヒカゲシビレタケ 25
ナメコ 25
スギタケ 26
アカツムタケ 26
カオリツムタケ 26
チャナメツムタケ 27
ナガエノスギタケ 27
ショウゲンジ 27
クリフウセンタケ 28
ムレオオフウセンタケ 28
ムラサキアブラシメジモドキ 28
ヌメリササタケ 29
ムラサキフウセンタケ 29
オオワライタケ 29
ミドリスギタケ 30
ミイノモミウラモドキ 30
アカイボカサタケ 30
キイボカサタケ 30
シロイボカサタケ 30
ウラベニホテイシメジ 31
クサウラベニタケ 31
ハルシメジ 31
コンイロイッポンシメジ 32
ニワタケ 32
オウギタケ 32
ハナイグチ 33
ヌメリイグチ 33
チチアワタケ 33
アミタケ 34
キヒダタケ 34
キイロイグチ 34
ヌメリコウジタケ 35
ヤマドリタケモドキ 35
ムラサキヤマドリタケ 35
キアミアシイグチ 36
アメリカウラベニイロガワリ 36
ダイダイイグチ 36
ミドリニガイグチ 37
アシボソニガイグチ 37
アルカリキゾメニガイグチ 37
ブドウニガイグチ 38
ニガイグチモドキ 38
フモトニガイグチ 38
アカヤマドリ 39
ヤシャイグチ 39
キクバナイグチ 39
ミヤマベニイグチ 40
アシナガイグチ 40
ベニイグチ 40
ドクベニタケ 41
アイタケ 41
カレバハツ 41
クサイロハツ 42
ウコンハツ 42
キチチタケ 42
アカモミタケ 43
チチタケ 43
ルリハツタケ 43
ニオイワチチタケ 44
チョウジチチタケ 44
ハツタケ 44
アカハツ 44
クロラッパタケ 45
オオムラサキアンズタケ 45
ベニナギナタタケ 45
ホウキタケの仲間 46
ウスタケ 46
カンゾウタケ 46
ヤマブシタケ 47
コウタケ 47
ヒトクチタケ 47
マイタケ 48
ヒイロタケ 48
カワラタケ 48
マンネンタケ 49
コフキサルノコシカケ 49
ツチグリ 49
コツブタケ 50
クチベニタケ 50
ハタケチャダイゴケ 50
オニフスベ 51
ホコリタケ 51
カゴタケ 51
サンコタケ 52
スッポンタケ 52
アカダマキヌガサタケ 52
ハナビラニカワタケ 53
キクラゲ 53
アラゲキクラゲ 53
マユハキタケ 54
カキノミタケ 54
オオゴムタケ 54
シャグマアミガサタケ 55
クロノボリリュウタケ 55
トガリアミガサタケ 55
ヒイロチャワンタケ 56
オオセミタケ 56
カエンタケ 56

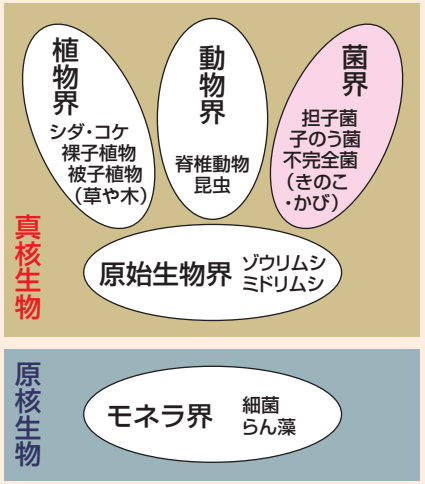
●兵庫のきのこ以外のもの
ベニテングタケ 57
ウスキキヌガサタケ 57
ヤマドリタケ 58
オオダイアシベニイグチ 58
オオシロアリタケ 58

きのことは

現在、生物の世界は、概念図のように、大きく五つの群に分けることができると言う説（五界説）が有力となっています。

キノコとは、「五つの群のひとつの菌界に属する生物が、子孫を残すために作る器官（子実体）で、肉眼で見える大きさのもの」と定義することができます。植物に例えるなら花や実に相当するものです。

キノコを作らないときは、土の中や、倒木などの中で、菌糸と呼ばれる円筒状のごく細い細胞として生活をしています。菌糸は、一列につながり、ところどころで枝分かれしたり、集まったりして網の目のように広がっています。



生物系統の概念図

キノコは、生活型や形から、ショウロなどの地下生菌、ヤマブシタケやオオゴムタケなど倒木や切り株に生える材上生菌、マツタケやヒメカンムリタケなど地面に生える地上生菌に分けることがあります。また、分類学的に、胞子が子のうという袋の中で作られる子のう菌、担子器と呼ばれる細胞の先端に胞子が作られる担子菌に分けることもあります。

サンゴハリタケ科　ヤマブシタケ

クロチャワンタケ科　オオゴムタケ

テングノメシガイ科　ヒメカンムリタケ

きのこの役割

キノコやかびなどの菌類は植物や動物の遺体の分解者と理解されています。ヤマブシタケやチシオタケなどキノコの働きによって倒木や落葉落枝が分解され、植物が利用可能な肥料分になります。

ラッシタケ科　チシオタケ

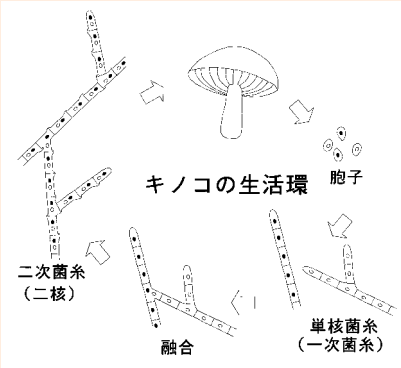
あるいは、アカマツやコナラなどの樹木の根と共生して、水分や、リン・窒素などの無機養分を与える菌類もあります。これらの菌類は菌根菌と呼ばれ、無機養分を与える代わりに樹木が光合成で作る炭水化物の10～20%をもらっていると言われています。マツタケやタマゴタケなどの菌根菌と共生している樹木は、水分や養分の吸収効率が上がるので生長が良くなり、病気にもかかりにくくなります。

テングタケ科　タマゴタケ

また、生きている昆虫にとりついて殺し、虫体からキノコを発生させる冬虫夏草の仲間もいます。この仲間は、サナギタケとブナアオシャチホコというガの関係のように、昆虫が発生した翌年に、その昆虫にとりついたキノコが大発生し、森林昆虫の密度をコントロールしていることが知られています。

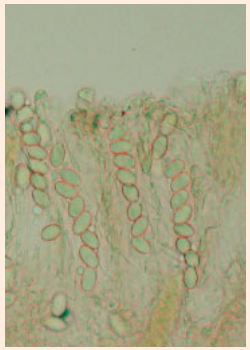
きのこの一生

キノコの胞子（植物に例えるなら種子に相当するもの）は発芽し、核を一つもった単核菌糸になります。単核菌糸は、生長や枝分かれ、合着を繰り返しながら、網状の単核菌糸体になります。相性の良い単核菌糸どうしが接近すると、菌糸壁が融合し、いずれか一方の菌糸細胞内の核が他方の菌糸細胞内に移動し、やがて核を二つもった二次菌糸になります。この二次菌糸の菌糸体からキノコができ、胞子が散布されます。



キノコが動物や植物と異なるのは、動物や植物の細胞が複相（２ｎ）の核を一つもっているのに対し、キノコは単相（ｎ）の核を二つもっています、また、動物や植物が雄と雌という二つの性をもっているのに対し、キノコは種類によって性の数が異なり、四つの性を持つキノコの仲間もいます。

桜の樹下に生えるトガリアミガサタケ

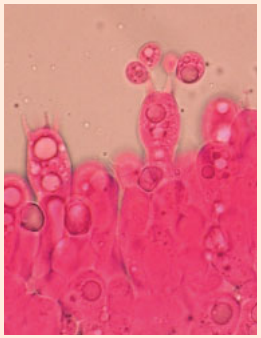


トガリアミガサタケの子のうとその中に並んだ８個の胞子

きのこの分類

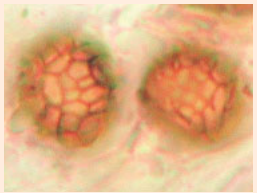
キノコを大きく分けると、子のうという袋の中に胞子が作られるトガリアミガサタケなどの子のう菌、担子器と呼ばれる細胞の先に胞子ができるヨソオイツルタケなどの担子菌に分かれます。子のうや担子器は、顕微鏡を用いないと見ることが出来ませんが、キノコを生物学的に分ける基本的な器官であるといえます。

ヨソオイツルタケ



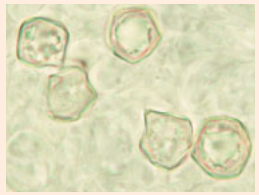
ヨソオイツルタケの担子器と先端にできた4胞子（フロキシンで染色）

担子菌にはさらに、軟質でヒダあるいは多数の小孔があるハラタケ類、サルノコシカケの仲間やホウキタケなどから成るヒダナシタケ類、最初は柔らかい卵状で、成熟すると体内に胞子を作ったり、地表に現れる腹菌類、柔らかくて弾力のあるキクラゲ類に分けることができます。キノコ狩りの対象となっているキノコは主にこの担子菌の仲間です。



オニイグチと胞子

ベニイグチと胞子



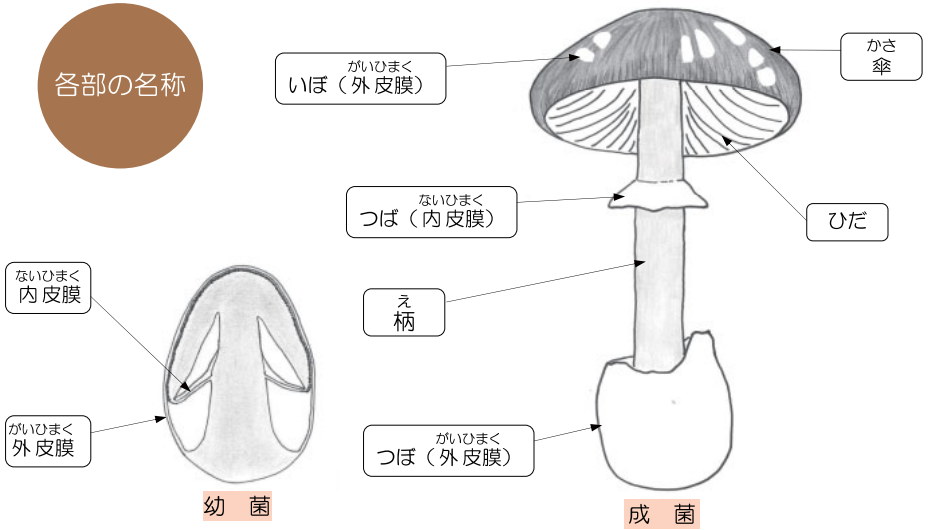
シロイボカサタケと胞子

キノコは微生物ですので、種類を正確に調べるためには顕微鏡観察を欠かすことができません。胞子だけでもヨソオイツルタケのように球形のものや、トガリアミガサタケのような楕円形、シロイボカサタケのような多角形のものもあり、また胞子表面の模様も様々です。

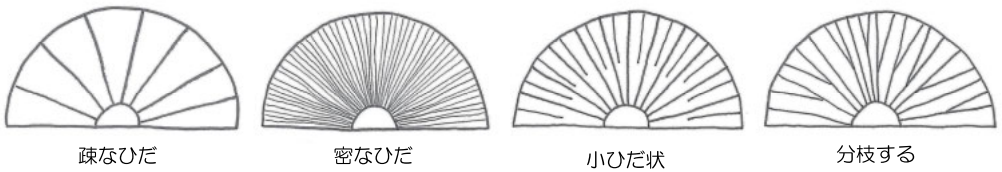
最近は、DNA の塩基配列による分類が進み、今までの形態に基づく分類体系が大きく見直されています。新しい分類では、目や科の再編成が行なわれ、新たな目や新しい科名となっています。

きのこの観察のポイント

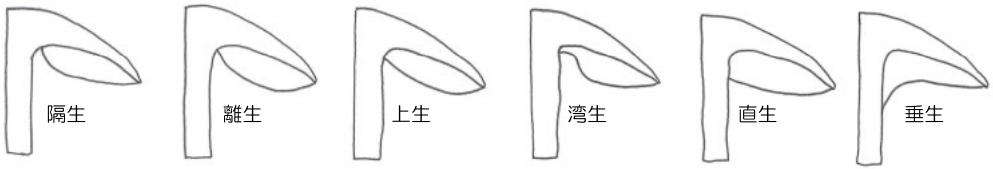
各部の名称



ひだの様子

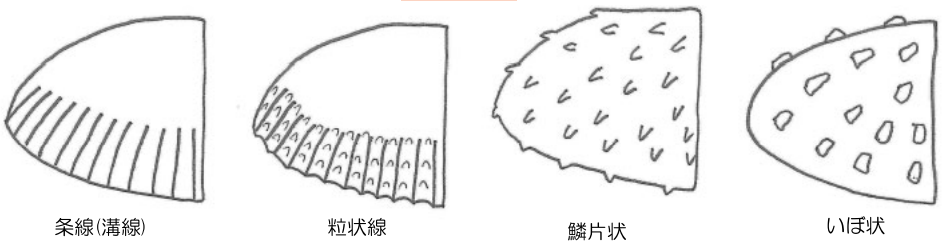


ひだの付き方

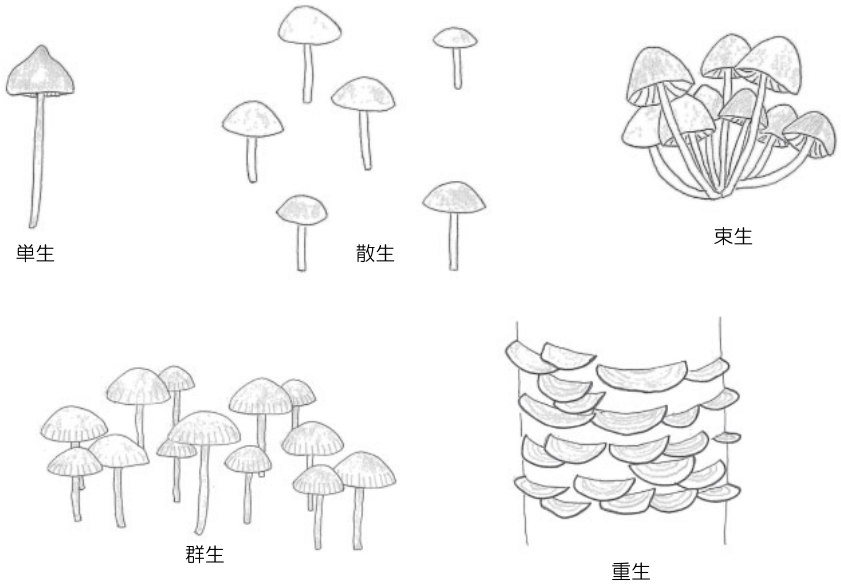


傘のかたち

傘の模様（もよう）



発生の仕方



キヒラタケ　フサタケ科
Phyllotopsis nidulans

晩秋に広葉樹の枯れ木に多数重なって発生することが多く、柄がなく、傘もひだも文字通り黄色味を帯びており、表面には毛が密生している。

肉は柔らかいが強靭で、匂いも良くないので食用には適さない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

トキイロヒラタケ　ヒラタケ科
Pleurotus djamor

全体がピンク～鮭肉色をした貝殻形～扇形のキノコで、肉も淡ピンク色である。夏～秋にヤナギ、ポプラなどの広葉樹の枯れ木に発生することが多い。

最近では人工栽培もされているようであるが、まだまだ、一般化はしていないようだ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヒラタケ　ヒラタケ科
Pleurotus ostreatus

世界で広く食べられているキノコで、西洋ではオイスターマッシュルームとも呼ばれる。

栽培キノコとしての歴史も古く、菌が強く栽培しやすいため原木栽培初心者におすすめのキノコである。空調施設でのビン栽培も行われていて、小売店では「シメジ」の名前で販売されているが、日持ちがあまり良くないためブナシメジに市場を取って代わられ、生産量が激減してしまった。野生では他のキノコが見られなくなる初冬まで発生し、時に雪をかぶって発生している姿は、このキノコの強い生命力を感じる。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ウスヒラタケ　ヒラタケ科
Pleurotus pulmonarius

ヒラタケとよく似ており、混同されることが多かった。

小形で、肉が薄く、傘の色がヒラタケよりも薄い。春から秋の比較的暖かい季節に広葉樹の倒木や枯れ木に発生する。香りが良く、味にも癖がないのでヒラタケよりも好まれるようだ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

マツオウジ　キカイガラタケ科
Neolentinus lepideus

夏から秋にかけて、主にマツの切り株や倒木から発生しているキノコで、クリーム色でササクレが目立つ。比較的大きなキノコで、触ると弾力がありしっかりとしており、柄は特に強靭である。独特のにおいがあり、松ヤニのにおいと言われているが、それほど嫌なにおいではない。

食べることができ、歯切れのいいキノコだが、人によっては中毒をすると言われており注意が必要だ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

シイタケ　ツキヨタケ科
Lentinula edodes

最も食卓に上る回数が多いと言っても過言でないキノコ。昔から食されており、栽培の歴史も古く江戸時代前期には原木栽培が始まったとされている。発生時期は春と秋でその名の通りシイやコナラといった広葉樹の倒木や切り株などに発生する。

中国名の香菇にも見られるように、干すと強まる香りが特徴。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ホンシメジ　シメジ科
Lyophyllum shimeji

アカマツやコナラなどと共生している菌根性キノコ。「味シメジ」と言われ、おいしいキノコの代表とされてきたが近年は激減している。発生時期は晩秋。菌輪を描いて一面に出る様が占地（しめじ）の語源。菌根性キノコだけに栽培が困難であるが、最近栽培が可能になった。

発生時期 1 2 3 4 **5** 6 7 8 9 **10** **11** 12

シャカシメジ　シメジ科
Lyophyllum fumosum

秋にコナラとマツの混生林などに発生する。

根元で多数が合着し、株状になる。幼菌の時の様子が釈迦の螺髪（らほつ、カタツムリ形のぶつぶつ）に似ていることからシャカシメジと呼ばれる。ホンシメジと近縁で食味も良く珍重されている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 **9** **10** 11 12

ヤグラタケ　シメジ科
Asterophora lycoperdoides

キノコは様々な場所に発生するが、このキノコは他のキノコの上から発生する。発生場所は珍しいが比較的よく見られる。

夏から初秋に古くなったクロハツなどのキノコに発生する白くて小さなキノコである。このキノコのもう一つの特徴は、ひだで作られる胞子とは別に、傘の表面に褐色粉状の厚膜胞子を形成する。

発生時期 1 2 3 4 5 **6** **7** **8** **9** 10 11 12

ウラムラサキ　ヒドナンギウム科
Laccaria amethystina

夏～秋に林地に発生し、小型で全体が紫色の可愛らしいキノコである。乾くと色があせるが、傘の裏側のひだは常に紫色である。

発生時期 1 2 3 4 **5** **6** **7** **8** **9** **10** 11 12

ツキヨタケ　ツキヨタケ科
Omphalotus japonicus

夏～秋にブナの枯木や倒木などに発生する毒キノコである。シイタケやムキタケと間違って、中毒する事例が多い。柄の上部のリング状の隆起や、柄の断面の黒いシミなどの特徴から、判別することができる。発光性があり、新鮮なものを真っ暗なところで見れば、ひだがうっすらと光っているのがわかる。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 **9** **10** 11 12

ムラサキシメジ　キシメジ科
Lepista nuda

晩秋に広葉樹林内の落葉が堆積した場所に発生する中型のキノコ。傘はまんじゅう型から平ら、色は初め鮮やかな紫色だが、古くなると色あせた褐色となる。フウセンタケの仲間と混同しがちだが、傘裏のヒダの色がフウセンタケの仲間はさび褐色であるのに対し、このキノコは傘と同色である。

食べごたえのあるきのこで、落葉内に菌床を埋め込んで栽培することが可能。しかし、ものによっては埃くさいため、好き嫌いが分かれる。生食は毒。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 **10** **11** **12**

サマツモドキ　キシメジ科
Tricholomopsis rutilans

夏から秋に針葉樹の倒木や切株などに発生する中型のきのこで、スギ林で見ることのできる数少ないキノコのひとつ。黄色地に赤い斑点模様がありきれいなキノコだが、食べると中毒を起こすと言われている。サマツモドキの名前がついているものの、マツタケとは似ても似つかない。

発生時期　1 2 3 4 5 **6 7 8 9** 10 11 12

キシメジ　キシメジ科
Tricholoma flavovirens

秋にアカマツの混じった林に発生する全体が黄色い中型のキノコ。以前から食べられるキノコとして親しまれてきたが、最近フランスで大量に摂取した後に中毒死する事例が報告されており、注意が必要である。

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 **10** 11 12

マツタケ　キシメジ科 ・ ニセマツタケ　キシメジ科
Tricholoma matsutake / *Tricholoma fulvocastaneum*

日本におけるキノコの王様とその近縁種。形は良く似ているが、マツタケがアカマツ林に生えるのに対し、ニセマツタケは広葉樹林に生える。またニセマツタケの方が発生時期が早く、「サマツ」の名で食す地方もある。マツタケに比べ肉質が軟らかく香りがほとんど無いため、商品価値はかなり落ちる。

マツタケ

ニセマツタケ

マツタケ
発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 **10** 11 12

ニセマツタケ
発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 **9** 10 11 12

ナラタケ　タマバリタケ科 ・ ナラタケモドキ　タマバリタケ科
Armillaria mellea s.l. / *Armillaria tabescens*

両種とも木材腐朽菌であるが、生命力が強く、生きているコナラやサクラに取り付いて、木を弱らせたり枯らしたりする困り者である。つばのある方がナラタケで、ない方がナラタケモドキである。

ナラタケには数種の生物学的種が含まれていることが分かっているが、素人には判別は難しい。

ナラタケ

ナラタケモドキ

ナラタケ
発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 **10** 11 12

ナラタケモドキ
発生時期　1 2 3 4 5 6 **7 8 9** 10 11 12

オオイチョウタケ　キシメジ科
Leucopaxillus giganteus

スギ林、竹林に群生する白くて大型のキノコ。傘表面の絹糸状の光沢、傘縁部の強い巻き込み、傘中央のくぼみが特徴。旨味は強いが粉臭さがあるため、油で炒める料理に向いている。近年、菌床をスギ林に埋め込む手法で栽培が可能になった。

発生時期　1 2 3 4 5 6 **7 8 9** 10 11 12

スギヒラタケ　所属科未確定
Pleurocybella porrigens

夏から秋にスギなどの針葉樹の倒木や切り株に、多数重なりあって発生するキノコ。

最近まで一般的な食用キノコとして扱われていたが、平成16年にこれによる中毒死の事例が相次いだため、厚生労働省が摂取しないよう注意を呼びかけている。

発生時期　1 2 3 4 **5 6 7 8 9** 10 11 12

ムキタケ　ガマノホタケ科
Sarcomyxa serotina

晩秋にブナやミズナラなどの倒木に重なり合って発生する食用キノコ。表面にやや粘性がある。表皮をはがすことが出来るのでこの名前が付いた。中毒するツキヨタケと似ており、混じり合って発生していることもあるので、採取する時は注意を要する。根元を裂くと、ツキヨタケには黒いシミがある場合が多いが、ムキタケにはない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

フチドリツエタケ　タマバリタケ科
Mucidula brunneomarginata

秋にブナやミズナラの倒木に発生する中～大型の食用キノコ。

傘は湿っているとき強い粘性があり、放射状のしわがあることが多い。ひだはやや疎で、濃紫褐色に縁取られる。柄は紫褐色の斑紋に覆われる。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

チシオタケ　ラッシタケ科
Mycena haematopus

夏から秋に広葉樹の朽ち木に発生する小型のキノコ。

先が尖った釣鐘形の傘を持ち、色は褐色みを帯びた赤色。傘の縁に鋸歯状のフリンジがある。傷つけると暗赤色の液を出すことからこの名前が付いた。似た仲間に橙色の液を出す「アカチシオタケ」がある。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヒメカバイロタケ　ガマノホタケ科
Xeromphalina campanella

夏から秋に針葉樹の倒木や切り株に多数群生するキノコ。傘は小型で中央部分がくぼみ、色は樺色（褐色を帯びた橙色）である。雨の後、苔むしたマツの倒木にびっしり生えている姿は圧巻である。残念ながら食用的価値はない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ダイダイガサ　タマバリタケ科
Cyptotrama asprata

夏から秋にシイなど広葉樹の倒木や落枝に発生する小型のキノコ。

傘は表面に綿質の柔かい棘がある。傘の表面は鮮やかな燈黄色で、ひだは白い。日本では関東以南に分布する南方系のきのこである。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

イボテングタケ　テングタケ科
Amanita ibotengutake

夏から秋にモミやマツ等の樹下に発生する中型～大型のキノコ。傘は黄褐色～橙褐色～暗褐色で、汚白色～淡褐色の尖ったいぼを多数全面に着ける。ひだは白色～淡クリーム色。柄は白色～淡黄色で中空。つばは膜質。柄の基部は球状～広楕円球状に膨らみ、上部には数条の環状の微細ないぼを付着する。類似種のテングタケの方が普通は小さく、傘のつぼの破片は尖らない。また、つぼの上部に一重または二重のカラー状環が着く。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

タマゴタケ　テングタケ科
Amanita hemibapha

夏から秋の比較的気温が高い時期に広葉樹、モミツガ林等に発生する。白い卵のようなつぼ、条線に縁取られた赤い傘、橙と黄色のだんだら模様の柄、橙色のつばをもつ。「派手なキノコは毒キノコ」との噂を打ち破る代表選手で、旨味が強く美味である。

発生時期 1 2 3 4 5 **6 7 8 9 10** 11 12

タマゴタケモドキ
テングタケ科
Amanita subjunquillea

夏から秋に針葉樹林から広葉樹林に発生する中型のキノコ。傘はくすんだ燈黄色から淡黄色で条線はなく、柄は白色から淡黄色で黄色の繊維状小鱗片を帯びる。つばは白色、根元には白色で袋状のつぼを持つ。死亡例があるほどの猛毒を持つため注意が必要である。

発生時期 1 2 3 4 5 **6 7 8 9 10** 11 12

クロタマゴテングタケ
テングタケ科
Amanita fuliginea

夏から秋にシイやカシ林に発生する。小～中型で、傘は暗褐色で繊維状、中央部はほぼ黒色。
柄は帯白色～灰色で、だんだら模様が現れることが多い。柄の上部に灰色膜質のつば、基部には白色袋状のつぼがある。猛毒で中国では多数の死亡例があるという。

発生時期 1 2 3 4 5 **6 7 8 9 10** 11 12

カブラテングタケ　テングタケ科
Amanita gymnopus

夏から秋に広葉樹林に発生する大形のきのこ。傘の表面は黄色～黄土色を帯び、淡黄色～淡褐色の薄い膜質のつぼの破片で覆われる。
柄はクリーム色で基部は膨らみカブラ状となるのでこの名前がある。つばは膜質で二重に付くが落ちやすい。有毒で、独特の強い臭気がある。

発生時期 1 2 3 4 5 **6 7 8 9 10** 11 12

シロオニタケ　テングタケ科
Amanita virgineoides

夏から秋にアカマツやコナラ林に発生する大型のキノコで、全体が真っ白であるため遠くからもよく目立つ。傘の表面にいぼを多数つけている。幼菌時の傘は球状で、初めて見るとゴルフボールが地面から突き出したようにも見える。白くていぼのあるキノコは他にも多く、有毒のものが多い。

発生時期 1 2 3 4 5 **6 7 8 9 10** 11 12

ハイカグラテングタケ
テングタケ科
Amanita sinensis

夏から秋ごろにアカマツやコナラ林に発生する大型のキノコ。傘の表面が灰褐色の粒や粉に厚く覆われており、ほこりが溜まったように見える。柄の表面も同様に粉状で手で触れると取れやすい。また、膜質のつばを有しているが脱落しやすい。

発生時期 1 2 3 4 5 6 **7 8 9 10** 11 12

ヒメベニテングタケ
テングタケ科
Amanita rubrovolvata

夏から秋にブナ・ミズナラ林、シイ林、カラマツ林に発生する。傘は朱色で条線のある周辺部は黄色を帯び、傘の上の粉質のいぼや柄も淡黄色である。ベニテングタケと比べかなり小型で、発生林も異なることから容易に区別できる。神経系、胃腸系の中毒を起こす毒キノコでもある。

発生時期 1 2 3 4 5 **6** **7** **8** **9** **10** 11 12

ドクツルタケ
テングタケ科
Amanita subjunquillea var. *alba*

ニオイドクツルタケ
テングタケ科
Amanita oberwinklerana

両種とも夏から秋に針葉樹林や広葉樹林に発生する全体が白色の中型のキノコ。傘の中央はクリーム色を呈することもある。柄は平滑または、細かくささくれ、根元は膨れて袋状のつぼになる。つばは柄の上部につき、膜質。どちらのキノコか不明であるが、平成5年に加古川市の男性が三木市で採取したものを料理、一本程食べ、中毒死している。ドクツルタケのつぼは球形で小型、水酸化カリウム溶液でどの部分も黄色に変色し、胞子は小さく球形である。ニオイドクツルタケのつぼはより大きく、同溶液でも変色せず、胞子はより大型で、広楕円形である。なお、亜高山帯に産するつぼが大きなドクツルタケは別種か？

ドクツルタケ

発生時期 1 2 3 4 5 6 **7** **8** **9** **10** **11** 12

ニオイドクツルタケ

発生時期 1 2 3 4 5 6 **7** **8** **9** **10** **11** 12

ドクツルタケとその胞子

ニオイドクツルタケとその胞子

ササクレシロオニタケ
テングタケ科
Amanita eijii

夏から秋にアカマツやコナラ林に発生する中型のキノコ。全体に白色で、傘の表面に褐色を帯びたいぼがあり、成熟するにつれて褐色が強くなる。柄の中央部から下部にかけて表皮がめくれたような著しいささくれがあり、下方へいくほど大きなささくれとなる。

発生時期 1 2 3 4 5 6 **7** **8** **9** **10** 11 12

オオオニテングタケ
テングタケ科
Amanita grandicarpa ined

最近発見された超大型のキノコで、夏から秋にコナラ林やシイ・カシ林に発生する。傘の径も高さも30cmを越すようなものも少なくない。傘の表面に褐色のいぼがあり、柄の根元は地中に深く伸びる。古くなると不快臭を発するキノコが多いが、この種は幼菌時から独特の臭気がある。

発生時期 1 2 3 4 5 6 **7** **8** **9** **10** 11 12

ツルタケ
テングタケ科
Amanita vaginata

夏から秋にアカマツやコナラ林に発生する中形のキノコ。傘の表面は灰色～灰褐色で周辺には放射状の溝線がある。柄にはつばがなく、白色～淡灰色で、根本には白色のつぼがある。

発生時期 1 2 3 4 5 **6** **7** **8** **9** **10** 11 12

ヨソオイツルタケ テングタケ科
Amanita hamadae

夏にクヌギ林等に発生する中型のキノコ。傘の中央部は褐色、周辺部は黄色で、溝状の条線がある。柄にはつばはなく、上部は黄色を帯び、下部は鮭肉色を帯びることが多い。柄の基部には白色のつぼがある。新種発表されて以来、西日本の4箇所でしか見つかっていない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ミヤマタマゴタケ テングタケ科
Amanita imazekii

夏から秋にマツ科やブナ科の林に発生する大型のキノコで、2001年に学名がついた。傘は白色から淡褐色で、中央部が濃色となる。県内では、太平洋側に白色のものが多く、日本海側では褐色のものが多いように思われる。

白い卵のようなつぼが根元を包み込んでいる。食毒不明

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ハイイロオニタケ テングタケ科
Amanita japonica

夏から秋にアカマツの混じる広葉樹林に発生する中型のキノコ。

傘は白地に灰色の比較的大きな角錐形のいぼをつける。つばは綿質～繊維状で早失性であり、柄の根元は紡錘状に太くなって地中に伸びる。尖ったいぼを付けているキノコにはオニタケと名付けられているものが多い。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

シロテングタケ テングタケ科
Amanita neoovoidea

夏から秋に主に広葉樹林に発生する中～大型のキノコ。傘は白色で淡黄土色のつぼの大きな破片が膜のように覆っていることが多い。

しばしば傘の縁からつばの名残が垂れ下がる。柄は白色で綿くずをまとうことが多く、柄の基部は棍棒上に膨らむ。有毒。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

フクロツルタケ テングタケ科
Amanita clarisquamosa s.l.

夏から秋に主にブナ科の林に発生する中型のキノコ。傘は白色から帯褐色で、淡紅褐色の綿屑状の小鱗片があり、しばしば大きなつぼの破片が付着する。柄は白色で鱗片に覆われ、肉は傷をつけると帯紅色に変色する。つばはないが、名前にあるように大型袋状のつぼが特徴的である。

現在、フクロツルタケと呼ばれているものには複数種が混ざっているようである。猛毒。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

コトヒラシロテングタケ
テングタケ科
Amanita kotohiraensis

夏から秋にシイなどの交じる広葉樹林に発生する中型～大型のキノコ。傘は純白で、白～帯淡黄色のやや綿毛状の膜質のつぼの破片を着ける。ひだは淡黄色。柄は白色で中実、表面にはささくれがあり、最上部に綿毛状膜質のつばを持つ。柄の基部はカブラ状に膨らみ、上部には微細ないぼが数条、環状に付着する。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

コシロオニタケ　テングタケ科
Amanita castanopsidis

夏から秋にシイ、コナラなどの林に発生する小～中型のキノコ。全体に白色である。傘の表面はやわらかいいぼに覆われる。つばは綿質～繊維状で、傘が開くときに破れ去る。柄の根元は膨らみ、周りに綿くず状～錐状のつぼが残る。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

キヌオオフクロタケ
ウラベニガサ科
Volvariella bombycina

夏から秋に広葉樹の腐朽木に発生する大型のキノコ。幼菌時は褐色のまだら模様の卵のようだが、それから顔を出す傘の表面は薄い黄色のやわらかな密毛に覆われ、キノコの表面とは思えないような美しさを持っている。つい触りたくなるキノコだ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヒイロベニヒダタケ
ウラベニガサ科
Pluteus aurantiorugosus

夏から秋に広葉樹の腐朽木に発生する小～中型のキノコ。傘は開けば中高の平らとなり、表面は橙赤色。ひだは白色、成熟すると紅色を帯びる。柄の表面は繊維状で、橙黄色。シイタケの古いほだ木に生えることが多い。食。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

オオシロカラカサタケ
ハラタケ科
Chlorophyllum molybdites

夏から秋に芝生、草地、ときに市街地の緑地に大発生することがある。中～大型で、傘の表面は白色。中央部に淡褐色の大きな鱗片を付ける。ひだは最初は白色であるが成熟するとオリーブ色になる。熱帯性のキノコで、近年、地球温暖化の影響を受けて北上しているのではないかと疑われている。有毒。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

カラカサタケ　ハラタケ科
Macrolepiota procera

夏から秋に竹林や草地等に発生する大型のキノコ。傘は初め球形だが開くと平らになる。ひだの色は白色。傘表面は淡褐色で褐色の大きな鱗片が目立ち、肉はマシュマロのようにふわふわと軟らかい。柄は長く、時に30cmにもなる。食用だが近縁に有毒のものがあるため注意すること。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ウスキモリノカサ　ハラタケ科
Agaricus abruptibulbus

夏から秋に腐植の多い広葉樹の林に発生する中型のキノコ。

傘の表面は黄色い絹のような滑らかさを持っている。ひだは比較的遅くまで薄い綿状の内皮膜に覆われており、それが膜状の大型のつばとなって柄の上部に残る。ひだは最初白色だが、紅色を経て紫褐色に変わる。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

コガネタケ　カブラマツタケ科
Phaeolepiota aurea

夏から秋に林地や道端に多数群生する大型のキノコ。傘と柄は黄金色から黄土色で、同色のきなこ状の粉で覆われる。大きな膜状のつばは初め白色だが、やがて胞子によって褐色になる。歯ごたえが良く、食用になるが、独特な汗臭い匂いを持ち、中毒を起こす系統があるといわれている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

イヌセンボンタケ　ナヨタケ科
Coprinellus disseminatus

春から秋に腐朽の進んだ切り株などに多数群生する小型のキノコ。

傘は半球形～釣鐘形、表面は灰白色～淡紫灰色で、放射状の溝線がある。ひだは始め白色、のち黒色になる。柄は白色でもろい。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ムジナタケ　ナヨタケ科
Psathyrella velutina

夏から秋に道端や林道または草地など開けた地面から発生する小～中型のキノコ。全体が濃褐色の鱗片に覆われ、傘の縁部に繊維状の皮膜の残片をつける。キノコにはイタチタケやムササビタケ、キツネタケなど動物の名前のついたものが多い。毒。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヤナギマツタケ　モエギタケ科
Agrocybe cylindrica

夏から秋に発生する中～大型のキノコ。公園や街路樹のヤナギ類、ポプラ類、ニレ類、カエデ類の枯れた部分に重なり合って発生する。

皮膜が発達していて、傘が開くと縁で切れ大きなつばになる。美味で施設栽培が可能であるが、胞子が褐色で、子実体が汚れて見えるため、それほど流通していない。最近は胞子をつけない系統が栽培に用いられつつある。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

モエギタケ　モエギタケ科
Stropharia aeruginosa

夏から晩秋に林内地上に発生する中型のキノコ。傘の表面は青緑色～緑色で粘性があり後に黄色を帯びてくる。傘の周囲に白い綿くず状の鱗片を付けている。

写真で見ると綺麗なキノコだが、湿気の多い地面からよく発生していることや傘の表面に粘性があることから、ジメジメとしたイメージを持ったキノコだ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

クリタケ　モエギタケ科
Hypholoma lateritium

秋から冬にかけて広葉樹の切り株や土に埋まった倒木から束になって発生する中型のキノコ。傘は名のとおり栗色をしていて、傘の縁には白色繊維状の鱗片が付着することが多い。ひだははじめ黄白色だがやがて紫褐色になる。柄は上方が黄白色で下方に行くにしたがって茶褐色を帯び、つばは無い。食用として親しまれており、原木栽培が可能。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ニガクリタケ　モエギタケ科
Hypholoma fasciculare

春から秋にいろいろな樹木の切り株や倒木などに群生する小型のキノコ。傘やひだは黄色、肉も黄色で、強い苦みがある。ひだは成熟すると暗紫褐色になる。柄は傘と同色であるが、くもの巣状のつばの名残が付着する。猛毒で、クリタケと間違って摂食し、死亡した例もあるので注意が必要。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヒカゲシビレタケ　モエギタケ科
Psilocybe argentipes

春から秋に草地、公園、果樹園などの地上から発生する小～中型のキノコ。傘は円錐形で中央部には突起があることが多く、柄の下部には白いだんだら模様がある。傘や柄は傷つくと青く変色する。

催幻覚成分のシロシビンを含むので誤って食べると高所から飛び降りるなどの異常行動をとることがあり危険である。法律により所持が禁止されている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ナメコ　モエギタケ科
Pholiota microspora

秋に落葉広葉樹、特にブナの倒木や切り株に群生～束生する中型のキノコ。傘は黄褐色で表面はゼラチン状の粘液が著しい。柄にもゼラチン質のつばをつけるが消失しやすい。野生のナメコはブナ林でしか見ないが、実はスギやヒノキでも原木栽培が可能である。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

スギタケ　モエギタケ科
Pholiota squarrosa

埋もれ木や広葉樹の枯れ木の地際などに発生する中型のキノコ。傘の全面に比較的大きな褐色の鱗片を付けている。柄の上部には繊維状のつばがあり、つばから下部にかけて傘と同様の鱗片がついている。人により消化器系の中毒を起こすらしい。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アカツムタケ　モエギタケ科
Pholiota astragalina

春から秋に針葉樹の切り株などに発生する小～中型のキノコ。

傘ははじめ丸みを帯びた円錐形、のち中高の平らなまんじゅう形になる。傘の色ははじめ朱赤色のち帯赤褐色、周辺部は淡色。ひだは密で黄色を帯びる。肉は苦い。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

カオリツムタケ　モエギタケ科
Pholiota alnicola

主に秋ごろに広葉樹や針葉樹の地際や埋もれ木から発生する中型のキノコ。

傘も柄も黄褐色で、石鹸に似た比較的強い異臭があり、名前の由来ともなっている。一ヶ所から多数発生している場合が多く、食べられそうに見えるキノコだが、有毒である。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

チャナメツムタケ モエギタケ科
Pholiota lubrica

秋にブナ林内の埋もれ木から発生する中型のキノコ。傘表面はれんが色で粘性があり、帯白～帯黄色の鱗片を点在する。幼時、クモの巣状のつばを持ち、柄上部は白色、下部は褐色を帯びる。食感、味はナメコに似るが、ナメコよりも野性的な風味を持つ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ナガエノスギタケ
ヒメノガステル科
Hebeloma radicosum

秋に広葉樹林に発生する中～大型の甘い香りのするキノコ。傘は汚白色で帯褐色の鱗片を持つ。

柄は傘と同色で膜質のつばを持ち、柄の基部は根状になって、モグラの排泄所に達する。キノコはモグラの生息地を浄化し、樹木に肥料を与え、樹木はキノコに炭水化物を与えるという生息地浄化共生が近年明らかとなった。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ショウゲンジ フウセンタケ科
Cortinarius caperatus

秋にアカマツ林や広葉樹林に発生する中～大型のキノコ。

傘表面は黄土色で放射状のしわがある。柄は淡黄土色で中程に膜質のつばを持つ。マツタケ発生が減少してきた山によく発生するため、マツタケ施業の指標にもなる。食用となり、その形からボウズタケ、虚無僧タケと呼ばれることも多い人気のキノコ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

クリフウセンタケ フウセンタケ科
Cortinarius tenuipes

秋に広葉樹林に群生する中型のキノコ。

傘は淡黄土褐色で湿ると粘性がある。ひだは白色から肉桂褐色になり、極めて密。柄は細長くしばしば屈曲し、上部に綿毛状のクモの巣膜がある。別名ニセアブラシメジとも言い、人気が高い食用菌である。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ムレオオフウセンタケ
フウセンタケ科
Cortinarius praestans

秋に広葉樹林に発生する中型～大型のキノコ。石灰岩地帯などアルカリ性の土壌に発生するらしく、県内では蛇紋岩地帯で発生が確認されている。傘の表面は帯紫赤褐色～茶褐色で粘性が強く、白い外皮膜の残片をつけることがある。

柄は太く白色で上部にクモの巣状のつばをつける。食。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ムラサキアブラシメジモドキ
フウセンタケ科
Cortinarius salor

秋にアカマツ混じりの広葉樹林に発生する小～中型のキノコ。傘や柄は名前のとおり紫色で著しい粘性を有する。ひだは淡紫色のち肉桂褐色。食。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヌメリササタケ　フウセンタケ科
Cortinarius pseudosalor

秋に、主に広葉樹林に発生する中型のキノコ。傘はオリーブ褐色～茶褐色で中央部ほど濃色となり、著しい粘性がある。柄は円柱形で細長く、白色に紫色を帯び、下方ほど紫色が濃い。柄にもわずかに粘性がある。食。

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ムラサキフウセンタケ
フウセンタケ科
Cortinarius violaceus

春から秋にシイ、コナラ、ブナなどの広葉樹林の地上に発生する中～大型のキノコ。傘は暗紫色で細かくささくれた鱗片で覆われる。

ひだは暗紫色のちさび褐色となる。柄は傘と同色でビロード状のち繊維状。つばはクモの巣膜状で傘が開けば柄に付着する。食。

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

オオワライタケ　所属科未確定
Gymnopilus spectabilis

夏から秋に主に広葉樹の根元に発生する中～大型のキノコ。数本から数十本が株状となって発生する。傘も柄も明るい黄褐色で、ボリューム感があるが、食べると意識障害を起こすらしい。馬糞から発生するワライタケはオキナタケ科の小型のキノコで本種とは分類上異なる。

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ミドリスギタケ　所属科未確定
Gymnopilus aeruginosus

春から秋に主に針葉樹の材上に発生する小～中型のキノコ。傘は饅頭形からほぼ平らに開き、淡褐色の地に濃色のささくれを持つ。

ひだは最初は淡黄土色、のち胞子が成熟するとオレンジ色がかった褐色になる。柄は傘と同色か、やや暗色で、縦の繊維紋を持つ。つばはやや厚い膜質で、落ちてなくなりやすい。有毒。

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ミイノモミウラモドキ
イッポンシメジ科
Entoloma conferendum

春から秋に湿った枯木や地上から発生する小～中型のキノコ。

傘表面は灰褐色で中央部が丸山形に盛り上がる。柄は白っぽく光沢を帯びており、縦のねじれた模様が特徴的である。柄の根元には白色の綿毛状の菌糸が付着する。壊れやすいキノコで採取して持って帰ると傘の一部がよく壊れている。有毒。

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アカイボカサタケ・キイボカサタケ・シロイボカサタケ
イッポンシメジ科 *Entoloma quadratum*　イッポンシメジ科 *Entoloma murrayi*　イッポンシメジ科 *Entoloma album*

夏から秋に林内の地上に発生する小～中型のキノコ。傘は円錐形で繊維質、湿時条線があり、傘上部には鉛筆の芯のような疣があるのが特徴。柄も繊維状でねじれ、中空である。子実体全体がそれぞれ朱色、黄色、白色をしており、種名の由来にもなっている。この３種のキノコは顕微鏡的な差もほとんど無く、色以外での区別は難しい。胃腸系の毒を有するといわれている。

アカイボカサタケ

キイボカサタケ

シロイボカサタケ

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ウラベニホテイシメジ
イッポンシメジ科
Entoloma sarcopum

秋にブナ科樹種の林に発生する大型のキノコ。傘は帯褐灰色で白色の繊維で薄く覆われ、細かなかすり模様があり、しばしば指で押したような紋ができる。ヒダは名の通り肉色である。柄は白色で太く中実である。食用でその味はほろ苦い。大量に発生するため、塩漬けにして、冬場の保存食とされてきた。クサウラベニタケと間違えやすいので注意。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

クサウラベニタケ
イッポンシメジ科
Entoloma rhodopolium

夏から秋にブナ科樹種の林に発生する中～大型のキノコ。傘は灰色で乾けば絹状のつやが出るが、かすり模様は入らず、指で押したような紋もない。ヒダは名の通り肉色である。柄は白色でウラベニホテイシメジよりも細いことが多い。

消化器系の毒を持ち、県内で中毒例が多いキノコである。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ウメハルシメジ
イッポンシメジ科
Entoloma sepium

ウメやモモなどバラ科の樹木に菌根をつくり、5月の連休の頃に発生する中～大型のキノコ。前記のウラベニホテイシメジやクサウラベニタケによく似ており、食用とされているが、注意が必要である。県内では綾部山梅林などで発生することが確認されている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

コンイロイッポンシメジ
イッポンシメジ科
Entoloma cyanonigrum

夏から秋にアカマツやコナラの林に発生する中型のキノコ。傘と柄は深みのある青色で、ひだは白から明るいクリーム色。成長した個体はひだの一部がめくれあがっていることが多く、傘表面の青系の色とのバランスが非常に美しい。その色合いから一度覚えると忘れることのないキノコだ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ニワタケ
イチョウタケ科
Tapinella atrotomentosa

夏から秋にマツの古い切り株上やその付近の地上に発生する中～大型のキノコ。傘は褐色ビロード状で、ひだは垂生する。柄は強靭で、黒褐色の毛で覆われる。外国では有毒とされている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

オウギタケ
オウギタケ科
Gomphidius roseus

夏から秋にマツ林の地上に発生する小～中型のキノコ。傘はバラ色で湿っているときは粘性がある。ひだは垂生し、灰白色のち成熟すると黒色を帯びる。アミタケと一緒に生えていることが多く、特に美味ではないが、食用とされる。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ハナイグチ　ヌメリイグチ科
Suillus grevillei

夏から秋にカラマツ林の地上に発生する中～大型のキノコ。傘は赤茶色～黄金色で著しい粘液で覆われる。管孔は黄色で傷つけるとレンガ色に変色する。幼時には孔口が皮膜で覆われており、破れた皮膜は後につばとなる。美味しいキノコでファンも多いが、県内にカラマツ林が少ないため、見る機会は多くない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヌメリイグチ　ヌメリイグチ科
Suillus luteus

夏から秋に主にマツ林の地上に発生する中～大型のキノコ。傘は粘液で覆われ、暗褐色～黄褐色。

柄の表面は黄褐色の細粒点で密に覆われる。幼時、孔口はゼラチン質の皮膜で覆われ、のちつばになるが、傘の縁に付着することもある。人によっては下痢をする。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

チチアワタケ　ヌメリイグチ科
Suillus granulatus

夏から秋に主にマツ林の地上に発生する中～大型のキノコ。ヌメリイグチとよく似るが、傘の色がやや淡く、幼時、乳白色の液のしずくを孔口に付けることが多い。また、孔口は皮膜で覆われることはなく、つばを持たない。毒。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アミタケ　ヌメリイグチ科
Suillus bovinus

梅雨時期から秋にマツ林の地上に発生する中型のキノコ。傘は黄褐色で粘性がある。孔口は多角形で荒くやや垂生し、オリーブ黄色。柄は傘と同色。シバハリと呼ばれ県内全域で親しまれているキノコだが、近年アカマツ林の減少とともに発生量が減っている。加熱すると紫色に変わるのも特徴である。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

キヒダタケ　イグチ科
Phylloporus bellus

夏から秋に広葉樹林に発生する小～中型のキノコ。傘は黄褐色～褐色のビロード状で、成長すると平らに開く。イグチ類は傘の裏が管孔となっているのが特徴だが、このキヒダタケの仲間はひだ状となっている。ひだ状である点を除けば、形態や胞子などはその他のイグチ類とよく似ており、イグチ科に置かれている。胃腸系の毒を持つ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

キイロイグチ　イグチ科
Pulveroboletus ravenelii

夏から秋にアカマツやコナラの林に発生する小～中型のキノコ。傘、柄とも鮮やかなレモン色で、表面は粉物質に覆われており、持つと指に付着する。管孔もはじめ黄色だが成長すると暗褐色となる。また、孔口は比較的遅くまで黄色の皮膜に覆われており、後に一部が傘の周辺や柄につばとして残ることがある。胃腸系の毒を持つ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヌメリコウジタケ イグチ科
Aureoboletus auriporus

夏から秋にコナラなどの広葉樹林に発生する中型のキノコ。傘の表面は赤褐色～褐色。湿時には強い粘性があり、不規則なしわ状となっている。管孔は、鮮やかな黄色で傘表面の赤褐色とコントラストが美しい。肉に酸味があり、特徴のひとつとなっている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヤマドリタケモドキ イグチ科
Boletus reticulatus

夏から秋にコナラなどの広葉樹林に発生する中～大型のキノコ。傘は黄褐色～オリーブ褐色。表面はビロードの肌触りだが、湿時にやや粘性がある。柄は淡褐色で全面に網目がある。欧州で好んで食されるポルチーニ茸の一種。美味しいキノコであるが、気温が高いときに発生するので虫食い率が高い。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ムラサキヤマドリタケ イグチ科
Boletus violaceofuscus

夏～秋にコナラなどの広葉樹林に発生する中～大型のキノコ。傘は暗紫色のものが多く、黄斑を生じるものや、傘全体が黄色いものもある。柄は暗紫色で根元まで網目で覆われる。孔口は初め、白色の菌糸に覆われるが、成熟すると黄褐色になる。幼菌時の紫色と白色の美しさが印象的である。美味しいキノコである。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

キアミアシイグチ イグチ科
Retiboletus ornatipes

夏から秋にコナラなどの広葉樹林に発生する中～大型のキノコ。 傘はオリーブ色を帯びた黄色で、表面は多少粉状となっている。柄も黄色で、名前のとおり柄の全体に明瞭な網目があることが特徴で、比較的覚えやすいキノコだ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アメリカウラベニイロガワリ イグチ科
Boletus subvelutipes

夏から秋にシイ、カシなどの広葉樹林に発生する中～大型のキノコ。傘は赤褐色～暗褐色でビロード状、孔口は赤色、柄は黄色の地に暗赤色の細点で覆われる。傷つけると直ちに、すべての部分で、濃青色～黒色に変色する。アメリカ東部にも産するので、このように名付けられた。食。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ダイダイイグチ イグチ科
Boletus laetissimus

夏から秋にコナラなどの広葉樹林に発生する中型のキノコ。全体が名前のとおり鮮やかな橙色で、傘も柄もほぼ平滑で、傷つけると青変する。肉も淡橙色である。食。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ミドリニガイグチ イグチ科
Tylopilus virens

夏から秋にアカマツやコナラ林に発生する中型のキノコ。傘はオリーブ色～オリーブ黄色で表面はややフェルト状。柄は淡黄色でしばしば中央以下が赤みを帯びたり、表面に不完全な網目を持つこともある。基部は鮮やかな黄色。管孔は白色のち淡紅色。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アシボソニガイグチ イグチ科
Tylopilus argillaceus

夏から秋に広葉樹林などに発生する小型のキノコ。傘は茶褐色～粘土色。表面は粉っぽく細かいビロード状。柄には微小な縦じわがある。傘と同色だが、上部が白い。管孔は、白色のち淡ワイン色で、傷つければ直ちに帯赤褐色に変色する。肉は非常に苦い。広葉樹林の遊歩道の法面などでよく見かけるが、図鑑には殆ど掲載されていない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アルカリキゾメニガイグチ イグチ科
Tylopilus alkalixanthus

夏から秋にコナラ林やブナ林に発生する中～大型のキノコ。傘は黄土色～淡褐色、ややビロード状で湿時やや粘性がある。

管孔は白色のち淡紅色、傷つけると褐色に変色する。柄は傘よりも淡色でしばしば褐色のしみを生じる。最近、中米のコスタリカで見つかったが、県内にも広く分布する。肉は水酸化カリ溶液で黄色く染まり、味は苦くない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ブドウニガイグチ イグチ科
Tylopilus vinosobrunneus

夏から秋にコナラ林などに発生する中型のキノコ。傘は饅頭型で、色は紫色を帯びた褐色～ワイン色。新鮮な個体では表面はややビロード状となる。管孔は、白色のち淡紅色となる。柄も傘と同色で、表面に網目や縦じわはない。柄が太く下部がこん棒状となり、どっしりした印象を受けるものもある。味は苦く食用とはならない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ニガイグチモドキ イグチ科
Tylopilus neofelleus

夏から秋にアカマツやコナラ林に発生する中～大型のキノコ。傘はややビロード状でオリーブ褐色～帯紅褐色。柄は傘と同色で普通は頂部に管孔から繋がる網目を持つ。管孔は白のち淡紅色、孔口はワイン紫色で縁取られる。肉は変色性がなく、その味は「ニガイグチ」の名を持つキノコの中でも非常に苦い。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

フモトニガイグチ イグチ科
Tylopilus alutaceoumbrinus

夏から秋に主にコナラ林の地上に発生する中型のキノコ。傘は淡褐色～暗褐色、ややビロード状。傘肉は厚い。管孔は白色のち淡紅色、傷つけると褐色に変色する。柄は傘と同色で縦長の繊維紋がある。味にはほとんど苦味がない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アカヤマドリ　イグチ科
Leccinum extremiorientale

夏から秋に広葉樹林に発生する大型のキノコ。傘は赤褐色～橙黄褐色でビロード状、成長とともに傘表面が割れ、淡黄色の肉が見える。肉は幼菌時には硬いが、やがて柔らかくなり、マシュマロのような手触りとなる。柄は黄色の地に橙色～黄褐色の細点がある。美味しいキノコだが、気温が高い時期に発生するため痛みやすい。調理すると料理全体が黄色っぽくなるのも難点の一つ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヤシャイグチ　イグチ科
Austroboletus fusisporus

夏から秋に主としてシイ、カシ林に発生する小～中型のキノコ。傘は肉桂色～黄褐色、ほぼ平滑で湿時やや粘性があり、中央部が少し突出することが多い。幼時孔口は皮膜で覆われ、大きくなると傘の縁から垂れ下がる。管孔は白色～汚白色。柄は傘と同色で、縦長の隆起した網目で覆われる。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

キクバナイグチ　イグチ科
Boletellus floriformis

夏から秋にカシ林などに発生する中～大型のキノコ。傘は淡褐色や赤褐色で、菊花状に割れた鱗片に覆われる。孔口は幼時皮膜で覆われ、のち傘の縁から垂れ下がる。管孔は黄色。柄は傘径に比べ細いものが多い。傘肉や管孔は強く青変する。白色タイプや赤色タイプがあり、研究者によると系統的に、二、三種に分かれるという。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ミヤマベニイグチ　イグチ科
Boletellus obscurecoccineus

夏から秋にブナ科の広葉樹林などに発生する中型のキノコ。遊歩道の法面などからよく発生している。傘は鮮やかな赤色で、ややビロード状。管孔ははじめはレモン色で古くなると褐色を帯びた黄色となる。柄の下部は白色で、上部には傘と同色の細かい鱗片がありピンク色に見える。赤・黄・白色の色合いが美しく、清楚なイメージのキノコだ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アシナガイグチ　イグチ科
Boletellus elatus

夏から初秋にアカマツ、コナラ、シイ、カシ林に発生する中型のキノコ。傘は半球型で色は赤褐色～栗褐色。湿ると弱い粘性がある。管孔は鮮黄色で、のちオリーブ色。その名の通り、傘径に比べて柄が著しく長く、ろくろ首を思い出す。柄の表面に縦に長い隆起した筋があるのも特徴。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ベニイグチ　イグチ科
Heimioporus japonicus

夏から秋にコナラやアラカシの交じる広葉樹林に発生する中～大型のキノコ。傘はワイン色を帯びた濃い赤色で表面は平滑。柄は傘と同色で明瞭な網目模様がある。梅雨明けごろに県内各地で一斉に発生することがよくある。鮮やかな赤色と柄の網目模様が特徴的で、名前の覚えやすいキノコだ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ドクベニタケ　ベニタケ科
Russula emetica

夏から秋にマツ林、広葉樹林に発生する中型のキノコ。傘は鮮紅色で湿時粘性があり、ひだ、柄はともに白色である。赤い傘のベニタケは数多くあるが、傘の表皮をはがしやすく、肉に強い辛みがあるという特徴から比較的容易に同定が可能である。有毒。

一般に、ベニタケ科のキノコは肉に球形細胞を多く含み、全体がもろい。また、ブナ科やマツ科樹種と共生関係にある菌根菌が多い。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アイタケ　ベニタケ科
Russula virescens

夏から秋に広葉樹林に発生する中～大型のキノコ。傘はつやがなく、淡灰緑色の地に青緑色の不規則なひび割れ模様が入り、傘の周囲には条線が見られる。ひだは白色、柄も白色で太くしっかりとしている。食欲をそそる色ではないが食用。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

カレバハツ　ベニタケ科
Russula castanopsidis

夏から秋にシイ林に発生する中型のキノコ。全体に灰色で、傘の中央部は灰褐色から淡い茶褐色。大きくひび割れて白い肉が見えていることが多い。全体に乾いた感じがするキノコで、和名を漢字表記すれば「枯葉初」。シイ林に特有のキノコで学名にもシイ属の学名が当てられている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

クサイロハツ　ベニタケ科
Russula aeruginea

夏から秋に広葉樹林、特にシデなどのカバノキ科樹下に発生する中型のキノコ。傘は鮮やかな草色～淡灰緑色で周辺部には条線がある。ひだは密で離生し、白色のち淡黄色。柄は白色～帯萌黄色で上下同大～下方がやや細まる。肉は白色で、やや辛味がある。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ウコンハツ　ベニタケ科
Russula flavida

夏から秋に広葉樹林に発生する中型のキノコ。傘も柄も鮮黄色で、傘の中央部や柄の下部は濃色となる。表面は微粉状。表面の色と対象的に、ひだは真っ白でコントラストが美しい。暗い林内でもよく目立つ。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

キチチタケ　ベニタケ科
Lactarius chrysorrheus

夏から秋にアカマツまじりの雑木林に発生する小～中型のキノコ。傘は中央のくぼんだ饅頭形～じょうご形で、湿時粘性があり、肉桂色～黄褐色、同心円状の環紋がある。ひだは汚白色～淡肉桂色で、傷つけると白色の乳液が出るが、すぐに黄色に変色する。味は辛く、有毒である。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アカモミタケ　ベニタケ科
Lactarius laeticolor

夏から秋にモミ林に発生する中型のキノコ。傘は橙黄色で不明瞭な環紋があり、湿時粘性がある。ひだは垂生し密、淡橙紅色。柄は傘と同色で所々にあばたがある。乳液は朱紅色で変色性はない。一見、アカハツとよく似ているが、変色性がないことと柄のあばたで見分けがつく。食。

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

チチタケ　ベニタケ科
Lactarius volemus

夏から秋に広葉樹林に発生する中型のキノコ。傘の表面はビロード状で黄褐色～赤褐色。ひだは密で白色、古くなると黄色味を帯びる。傷つけるとその名のとおり多量の乳液を分泌し、やがて褐色に変色する。栃木県ではチタケと呼ばれ、うどんやけんちん汁のダシとして人気が高い。

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ルリハツタケ　ベニタケ科
Lactarius subindigo

夏から秋にマツ林や広葉樹林に発生する中型のキノコ。名前のとおり全体が鮮やかな藍青色だが、古くなると色褪せて汚黄緑色となる。傘表面は濃色の環紋があり、中央部は褐色を帯びることが多い。

青色のキノコは珍しい上に、まれにしか発生しないので、見つけた時の喜びもひとしおだ。

発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ニオイワチチタケ　ベニタケ科
Lactarius subzonarius

・チョウジチチタケ　ベニタケ科
Lactarius quietus

両種とも夏から秋にブナ科樹種の樹下に発生する。傘表面には淡褐色と濃褐色の縞状の環紋があり、非常によく似ている。ニオイワチチタケは種名のとおり、カレーのような臭いがする。特に乾燥すると臭いが強くなり、付近を通りかかるだけで誰もが感じるほどである。チョウジチチタケも乾燥すると丁子（香辛料のクローブ）の臭いがするが、前種ほど強い臭いではない。

ニオイワチチタケ

チョウジチチタケ

ニオイワチチタケ
発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

チョウジチチタケ
発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ハツタケ　ベニタケ科
Lactarius hatsudake

・アカハツ　ベニタケ科
Lactarius akahatsu

両種とも夏から秋にマツ林に発生する中型のキノコ。傷つけると赤味がかった色の乳液を分泌し、傷口や傷んだ部分は緑色に変色する。ハツタケは全体がやや赤紫がかった褐色、アカハツはオレンジ色であるが、ひだの色で確認するのが最も確実である。食。

ハツタケ

アカハツ

ハツタケ
発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アカハツ
発生時期　1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

クロラッパタケ　アンズタケ科
Craterellus cornucopioides

夏から秋に、主にブナ科樹種の林に発生する小～中型のキノコ。時には群生し大きな菌輪を作る。細長いラッパ型や漏斗型をしており、傘表面は黒色～灰褐色、傘裏～柄にかけては表面よりも淡色で浅い隆起がある。肉質は薄く柔らかい。ヨーロッパでは死のトランペットとも呼ばれている。食。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

オオムラサキアンズタケ
アンズタケ科
Gomphus purpuraceus

夏から秋に、アカマツ混じりの雑木林などの地上に菌輪を描いて群生する漏斗状の中～大型のキノコ。全体が鮮やかな紫色であるが、古くなると胞子が付着して褐色を帯びる。肉は白色。食。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ベニナギナタタケ
シロソウメンタケ科
Clavulinopsis miyabeana

夏から秋に、林内地上に群状に束生する小型のキノコ。全体が細長く中は空洞である。最初は淡ピンク色～鮮紅色、のち退色する。

肉は表面と同色で、食べられるが、猛毒のカエンタケとの混同に注意が必要である。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ホウキタケの仲間
ラッパタケ科
Ramaria sp.

夏から秋に林内地上から発生し、根元から枝分かれを繰り返し、箒（ほうき)状の先端となる。先端部は赤やピンク、紫など派手な色となる種が多い。写真のものは先端が青みを帯びておりトビイロホウキタケと思われるが、ホウキタケの仲間は研究が遅れており、正確な同定は困難である。有毒種が多く注意が必要である。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ウスタケ　ラッパタケ科
Turbinellus floccosus

夏から秋に主にモミ林に発生する中型のキノコ。ラッパ状で、柄の根元まで窪んでいる。全体が淡褐色だが内部と根元は赤みを帯びる。外側は下部までしわ状のひだに覆われている。モミ林を代表するきのこのひとつで、9月から10月にモミの樹下でよく見かけるが、消化器系の毒がある。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

カンゾウタケ　カンゾウタケ科
Fistulina hepatica

春から秋にシイなどのブナ科樹種の地際近くに発生する中～大型のキノコ。傘は半円形～舌状で、表面は鮮紅色～暗赤褐色でざらつき、裏は黄白色～淡紅色で傷つけると暗赤色に変色する。肉は柔らかく、血紅色で所々に白色の筋模様が入り、まるで牛タンの様である。切ると血のような汁を滲ませるところも生々しい。酸味があるが食べることができる。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヤマブシタケ サンゴハリタケ科
Hericium erinaceus

秋に広葉樹の立木や枯木に発生する中～大型のキノコ。傘を作らず、上面を除く全面から白色の無数の針が垂れ下がる形状となる。その形が山伏の胸の飾りに似ていることからこの名が付いた。栽培も可能であり、中国では四大山海の珍味の一つとされている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

コウタケ マツバハリタケ科
Sarcodon aspratus

秋にアカマツ混じりの雑木林などに発生する中～大型のキノコ。アサガオのように中央部が窪んだ浅いろうと状。表面は褐色～黒褐色で、中央部ほど大きな、反り返った角状の鱗片がある。裏面は表面よりは淡い褐色で、針状。独特の香ばしい香りがあり、乾くとより強くなる。食用。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヒトクチタケ タマチョレイタケ科
Cryptoporus volvatus

春から夏に、枯れて間のないマツの幹に発生する中型のキノコ。

全体は半球形～ハマグリ形で上部は茶色で光沢があり、下部は白色で最下部に穴が一つ空いている。干魚のような臭いで様々な昆虫を誘引し、胞子の散布を手伝わせているようである。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

マイタケ 所属科未確定
Grifola frondosa

秋にミズナラ、シイなどブナ科の大木の地際近くに群生する大型のキノコ。扇形～へら形の傘が多数重なり合って塊を形成する。

傘の色は初め黒色～黒褐色で成長すると色が薄くなる。美味しいキノコだが、タンパク質分解酵素を含むため、生で茶碗蒸しに入れると、卵が固まらない。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヒイロタケ タマチョレイタケ科
Pycnoporus coccineus

春から秋に、日当たりの良い広葉樹などの枯れ木や倒木に群生する中型のキノコ。全体が鮮やかな朱紅色であるが、古くなれば、色あせて灰色に変わる。肉はコルク質～革質。草木染めの材料になり、ミョウバンを使えば、黄色～オレンジ色に染めることができる。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

カワラタケ タマチョレイタケ科
Trametes versicolor

広葉樹、まれに針葉樹の枯木に重なり合って発生し、ほぼ一年中見られる。傘は半円から扇型で、肉は強靭。表面は青灰褐色から茶褐色まで変異に富み、濃色の環紋模様がある。裏面は白い。抗がん剤として注目されたこともある。最近では、菌糸がクワガタムシなどの幼虫飼育用としても利用されている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

マンネンタケ タマチョレイタケ科
Ganoderma lucidum

夏から秋に広葉樹の枯木や生木の地際部に発生する小～中型のキノコ。傘は半円形～腎臓形で偏心生の柄がある。傘表面は初め黄白色、後に淡褐色～赤褐色となり、ニスのような光沢がある。古くから漢方薬として利用され、霊芝の名で販売されている。栽培が可能。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

コフキサルノコシカケ
タマチョレイタケ科
Ganoderma applanatum

通年、主に広葉樹の生木や枯木上に発生する大型のキノコ。多年生。傘は半円形で、初めは扁平だが、やがて蹄形～釣鐘形となる。傘表面は灰白色～灰褐色。孔口は初め類白色～帯黄色で、新鮮なものは傷を付けると褐変する。無柄。傘表面はしばしばココア色の胞子に覆われ、その名のとおり粉を吹いたようである。古くから漢方薬として利用されている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ツチグリ ディプロシスチジア科
Astraeus hygrometricus

夏から秋に、林内の裸地などに発生する中型のキノコ。扁平した球形で、成熟すると外皮は6～10片の星形に裂ける。外皮は乾湿に応じて開閉し、その運動により頂孔から粉状胞子塊を出す。学名のアストラエウス・ヒグロメトリクスは「湿度計の星」の意。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

コツブタケ ニセショウロ科
Pisolithus arhizus

春から秋に、海岸や公園の松林や雑木林に発生する中～大型のキノコ。頭部は類球形で、内部には最初黄色の粒を持つ。その粒は上部ほど大きく、成熟すると粒は壊れてチョコレート色の胞子塊となる。ヨーロッパでは古くから染色に使われており、黄金色に染めることができる。また、菌根資材として緑化に利用されている。毒。

（円内は断面）

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

クチベニタケ クチベニタケ科
Calostoma japonicum

夏から秋に、遊歩道の切土面や林内の裸地などに発生する頭部が 1 cm程度の球状のキノコ。全体が淡褐色で植物の実と間違えられることが多い。頂部が朱色の星状となっており、そこから胞子を放出させる。偽柄と呼ばれるゴム状の根のような菌糸束の束を持っており、マンガに描かれていたタコに似た火星人のように見える。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ハタケチャダイゴケ ハラタケ科
Cyathus stercoreus

梅雨期から秋に、畑や休耕田、庭園などの腐植の多い場所に発生する。直径 5mm 程度のコップ状で、外側には褐色の剛毛を付けている。コップの中には黒い碁石のような小塊粒が入っており、雨滴などの衝撃で飛び出し胞子を拡散させる。植木鉢やプランターなどにも発生することがあるが、非常に小さいので見過ごすことが多い。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

オニフスベ　ハラタケ科
Calvatia nipponica

夏から秋ごろ草地や公園など開けた場所に発生する。直径20～50cmで白い球状のキノコ。人目につきやすいところに突然バレーボールのような白い塊となって現れ、よく目立つ。幼菌時は弾力もありフカフカとしているが、成熟すると褐色に変色し外皮が破れ、綿くず状となって壊れていく。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ホコリタケ　ハラタケ科
Lycoperdon perlatum

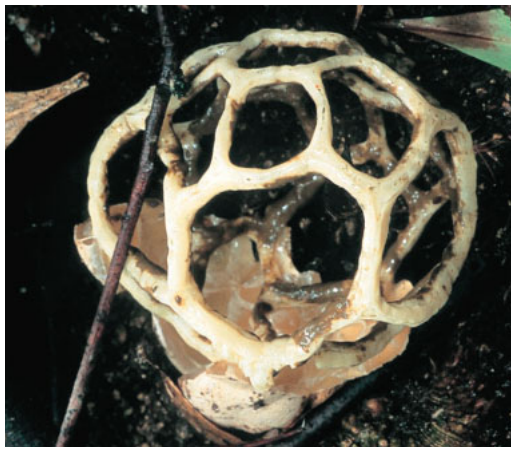
夏から秋に林内や道端に発生する小～中型のキノコ。球形で表皮には小さなトゲがあり、根元は柄状となっている。胞子が成熟すると頂点に小さな乳口が開き、物理的刺激により胞子が出てくる。胞子の出る様が、名前のとおりほこりが噴出しているように見え、観察会では子供達に人気がある。胞子が未熟で断面が真っ白なうちは食用可。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

カゴタケ　アカカゴタケ科
Ileodictyon gracile

春から秋に林内の地上に発生する中型のキノコ。幼菌は赤みを帯びた白色で、弾力があり、丸い。成熟すると、折りたたまれていた球形のかごが現れる。胞子を含んだ粘液（グレバ）はカニ味噌状で、かごの内側に付着し、甘いにおいで、ダンゴムシなどを引きつける。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12



サンコタケ　アカカゴタケ科
Pseudocolus schellenbergiae

梅雨から秋に林内の地上に発生する高さ5cm程度のキノコ。黄色や紅色をしており色も形も美しいが、3本の指の内側に黒褐色のグレバを付けて異臭を放つ。通常は3本の指だが4本のものや6本のものもある。地面から指を出して何かをつかもうとしているようだ。仏具の三鈷に似ていることから名付けられた。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

スッポンタケ　スッポンタケ科
Phallus impudicus

初夏から秋に竹やぶや林縁に発生する大型のキノコ。幼菌はずしりと重い白色のボール状で頂部を突き破って発生する。柄は白色でスポンジ状。傘表面は網目状で暗緑色の強烈な臭いのするグレバがついている。グレバを洗い流すと食用になるが、臭いで食欲を失う場合も多い。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

アカダマキヌガサタケ
スッポンタケ科
Dictyophora rubrovolvata

梅雨から秋に竹林の地上に発生する中～大型のキノコ。スッポンタケに網状のスカート（菌網）をはかせたようなキノコで、幼菌は赤味を帯びた弾力のあるボール状。グレバには甘いにおいがある。中国では栽培されていて、菌網は高級食材である。近縁種のキヌガサタケは菌網がより長く、優美であるが、グレバには悪臭がある。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ハナビラニカワタケ
シロキクラゲ科
Tremella foliacea

初夏から秋に、コナラなどの立ち枯れの広葉樹などに発生する中～大型のキノコ。ゼラチン質の花びら状のキノコが多数重なりあって発生し、ソフトボール大になる。目線の高さぐらいに発生することが多く、立ち枯れの幹に大きな花が咲いているようにも見える。

発生時期 1 2 3 4 5 **6** **7** **8** **9** **10** **11** **12**

キクラゲ キクラゲ科 と アラゲキクラゲ キクラゲ科
Auricularia auricula-judae / *Auricularia polytricha*

春から秋のほぼ年中、広葉樹材上に多数群生する小～中型のキノコ。背面の一部で材に付着し、形は耳形や椀形、円盤形など変異に富む。乾燥すると小さく縮み、雨が降れば元に戻る。前者は全体が茶褐色～暗紫褐色でゼラチン質、ガラスのような透明感があり、つるっとした触感。後者は内面が褐色～暗紫色で背面は灰褐色。背面はアラゲの名前の通り白色の細毛に覆われており、前者よりも固い感触。両者とも食材として利用されるキクラゲであるが、出回っているものはほとんどが後者。前者の食感は柔らかくグミのようだが、後者は少々固くコリコリする。

キクラゲ

アラゲキクラゲ

キクラゲ
発生時期 1 2 3 4 5 **6** 7 8 9 **10** **11** **12**

アラゲキクラゲ
発生時期 1 2 3 4 5 **6** **7** **8** **9** **10** **11** **12**

マユハキタケ マユハキタケ科
Trichocoma paradoxa

主にタブノキの切り株等に発生する直径１cm以下の小さなキノコ。初め黄色でドングリのお椀状。成長するにつれて先端がハケ状に伸び、淡褐色から褐色となる。眉掃きとは、白粉(おしろい)をぬった後に、眉の白粉を払う小さな筆のこと。タブノキのほか、コジイやイヌビワの樹幹にも発生する。

発生時期 1 2 3 **4** **5** **6** **7** **8** **9** **10** **11** 12

カキノミタケ マユハキタケ科
Penicilliopsis clavariiformis

秋に柿の種子から発生する小型のキノコ。熱帯性のキノコで、日本では普通、無性生殖のための胞子を作る黄色棒状のキノコしかできないが、適温で培養すると有性の胞子を作る丸い頭部を持ったキノコができることが知られている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 **7** **8** **9** 10 11 12

オオゴムタケ クロチャワンタケ科
Galiella celebica

夏から秋に林内の落枝、倒木上に発生する小～中型のキノコ。全体が褐色～濃褐色、倒円錐形～半球形で、上部は平滑、周囲は綿毛状の菌糸で覆われ、内部はゼラチン質である。グロテスクなキノコだが、皮をむいて湯がき、糖蜜ときな粉をまぶせば美味という。

発生時期 1 2 3 4 5 6 **7** **8** **9** 10 11 12

シャグマアミガサタケ

フクロシトネタケ科
Gyromitra esculenta

春にマツなどの針葉樹林地上に発生する中型のキノコ。頭部は濃褐色～暗赤褐色で、著しい凹凸があり脳みそ状である。柄も凹凸が激しく淡褐色。頭部も柄も内部は空洞となっている。強い毒性を持つキノコで死亡例もある。兵庫県版レッドデータブックに希少種として掲載されている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

クロノボリリュウタケ

ノボリリュウタケ科
Helvella lacunosa

夏から秋に林内の地上に発生する小型～中型のキノコ。頭部が黒灰色の鞍形で、反り返ったような形をしている。柄は頭部よりも淡色で、縦長のくぼみがある。ノボリリュウタケの仲間は特徴的な形をしており、比較的覚えやすいが、大きさや色、しわの有無などが異なる数種のキノコが存在している。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

トガリアミガサタケ

アミガサタケ科
Morchella conica

春に林内や草地に発生する中～大型のキノコ。網の目状の頭部と柄からなり、名前を漢字で書けば尖り編笠茸。頭部は円錐形で上部が尖り褐色、網は縦脈が発達し、横脈は発達が悪い。柄は淡黄土色。フランス料理ではモリーユと呼ばれ珍重されるが、必ずゆでこぼして食用にすること。生食は毒。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ヒイロチャワンタケ

ピロネマキン科
Aleuria aurantia

初夏から秋に林道脇などに群生する小～中型のキノコ。特に粘土質の裸地に多い。椀型または皿型で、オレンジがかった赤色（緋色）で外側は少し色が薄く、柄はない。群生している姿はその名のとおり、赤い小さなお椀が地面に並んでいるようである。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

オオセミタケ

オフィオコルジケプス科
Ophiocordyceps heteropoda

春から夏に林内の地中にいるアブラゼミなどの幼虫から発生する小型のキノコ。先端部は褐色の球状、柄は淡色の円柱状。冬虫夏草の仲間は、昆虫にとっては恐ろしい病原菌であるが、様々な森林害虫の生息密度をコントロールする重要な役割を果たしている。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

カエンタケ

ボタンタケ科
Podostroma cornu-damae

夏から秋に林内地上や切り株に生える中型のキノコ。円筒状～分岐した手の指状になり、表面は赤橙色を帯びる。珍しいキノコであったが、最近は増加傾向にあるようだ。少量でも摂食すれば死に至ることがある。触るだけでも炎症が起こるため、触った場合は、石けんを使ってよく水で洗うこと。

発生時期 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

兵庫のきのこ以外のもの

県内ではこれまでに1000種以上のキノコが確認されており、今後も次々と新しいキノコが見つけられると考えられています。
この頁では、兵庫県内には発生しないもの、県内では見つかっていないが今後見つかる可能性のあるもの、県内には発生しないと思われていたが発生が確認されたものなど、兵庫のキノコとは言えない種を紹介しています。

ベニテングタケ　テングタケ科
Amanita muscaria

夏から秋にモミ・ツガなどの針葉樹林やシラカバなどの交じる広葉樹林に発生する中型～大型のキノコ。傘は明るい鮮赤色～鮮黄色で、全体に白いいぼを規則正しくつける。ひだは白色。柄も白色で表面にはささくれがあり、上部に膜質のつばを持つ。基部は塊状に膨らみつぼの破片が環状に付着する。発生する地域は主にブナ帯より上部の亜高山帯付近で、日本では中部地方以北にしか自生しないが、平成20年に朝来市で県外産のウラジロモミを植栽した箇所から発生しているのが確認された。

ウスキキヌガサタケ
スッポンタケ科
Dictyophora indusiata f. *lutea*

梅雨から秋に林内の地上に発生する中～大型のキノコ。キヌガサタケの近縁種で、全体がほぼ黄色、グレバは暗緑色。広島県、京都府で確認されているが、県内ではまだ見つかっていない。

ヤマドリタケ　イグチ科
Boletus edulis

夏から秋に亜高山帯のトウヒ属樹下に発生する中～大型のキノコ。県内で見られるヤマドリタケモドキによく似ているが、傘に油を塗ったような光沢がある。ヨーロッパではポルチーニ茸と呼ばれ、高級キノコ。県内未発見。

オオダイアシベニイグチ
イグチ科
Boletus odaiensis

夏から秋に亜高山帯の針葉樹林に発生する中～大型のキノコ。傘は帯黄赤色～黄褐色、管孔は黄色で傷つけると青変する。柄には不明瞭な赤色の網目があり、よく目立つキノコである。県内未発見。

オオシロアリタケ　シメジ科
Termitomyces eurrhizus

梅雨時期に森林の地上に発生する中～大型のキノコ。傘の中央部が円錐状に盛り上がり尖っているのが特徴。柄が地中深く伸び、タイワンシロアリの巣に繋がっている。シロアリは菌糸を食用とするためにこのキノコを栽培しているとも言われている。美味。沖縄本島が分布の北限とされている。

文　献

青木実他著・名部みち代編．2008．日本きのこ図版第二巻，日本きのこ同好会2．

浅輪和孝他編・青野茂他著．1997．きのこの100不思議，日本林業技術協会．

アレン，M．F．著・中坪孝之・堀越孝雄訳．1995．菌根の生態学，共立出版．

石川統他編．2010．生物学辞典，東京化学同人

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄編．2011．増補改訂新版　山溪カラー名鑑　日本のきのこ，山と溪谷社．

今関六也・本郷次雄編著．1987，1989．原色日本新菌類図鑑（Ⅰ，Ⅱ），保育社．

奥沢康正・奥沢正紀．1998．きのこの語源・方言事典，山と渓谷社．

呉興亮・戴玉成・李泰輝・楊祝良・宋斌．2011．中国熱帯真菌，科学出版社

相良直彦．1989．きのこと動物，築地書館．

下田道生・塩津孝博．2001．九州で見られるきのこ　なば，環境調査研究所．

土居祥兌．1989．キノコ・カビの生態と観察増補改訂版，築地書館．

長沢栄史監修・安藤洋子他執筆．2003．日本の毒きのこ，学習研究社．

平山吉澄．1998．オオオニテングタケ．関西菌類談話会会報 No.21：8-9．

細矢剛編・稲葉重樹他著．2008．菌類の不思議，東海大学出版会．

堀越孝雄・鈴木彰．1990．きのこの一生，築地書館．

本郷次雄監修・池田良幸著．2005．北陸のきのこ図鑑，橋本確文堂．

本郷次雄監修解説・上田俊穂他解説．1994．山溪フィールドブックスきのこ，山と溪谷社．

本郷次雄監修・幼菌の会．2001．カラー版きのこ図鑑，家の光協会．

Amtoft,A.,R.E.Halling & G.M.Mueller.2002.Tylopilus alkalixanthus, a new species of Boletaceae from Costa Rica and Japan.Brittonia 54(4):262-265.

Hongo,T.1971.Notulae Mycologicae (10).Mem.Shiga.Univ.,Vol.21:62-68.

Hongo,T.1985.Notes on Japanese larger fungi (23).Journ.Jap.Bot. Vol. 60 No.12:18-26.

Nagasawa,E.& T.Hongo.1984.New taxa of Amanita :Three new species and one new form from western Japan.Trans.mycol.Soc.Japan 25:367-376.

Nagasawa,E.& S.Mitani.2000.A New Species of Amanita Section Lepidella from Japan. Mem.Natn.Sci.Mus.,Tokyo,(32):93-97.

Oda,T.,C.Tanaka & M.Tsuda.2001.Amanita imazekii — a new species in Amanita section Caesareae.Mycologia Vol. 93, No. 6:1231-1234.

Oda,T.,T.Yamazaki,C.Tanaka,T.Terashita & M.Tsuda.2002.Amanita ibotengutake sp. nov., a poisonous fungus from Japan.Mycological Progress 1(4):355-365.

Yang,Z.L.1997.Die Amanita-Arten von Suedwestchina.Bibliotheca Mycologica 170:1-240.

Yang,Z.L.& Y.Doi.1999.A Contribution to the Knowledge of Amanita (Amanitaceae, Agaricales) in Japan.Bull.Natn.Sci.Mus.,Tokyo,Ser.B,25(3):107-130.

あとがき

県内でキノコを採取していると地元の年配の方々から「"タケ"を採っているのか」とよく聞かれる。最近でこそ、"キノコ"が一般的になってきたが、県内の年配の方々には"タケ"のほうが通用するようだ。全国的にみても、ミミ、ナバ、クサビラ、コケなど呼び名はいろいろである。

同じ種であっても地域によって、場合によっては隣の村とも呼び名が違っていたりする。ウラベニホテイシメジは、宍粟では一般にイッポンシメジと呼ばれており、アミタケは県内ではシバハリと言ったほうが通用する。また、モミタケが但馬の竹野町でシロボウズと呼ばれていたが、他の但馬地域ではシロボウズでは通用しなかった。同じ種であってもこれだけ呼び名が違うのはなぜだろう。植物や昆虫でも呼び名が違うことはあるが、キノコの比ではない。

キノコは、昔からたいへん身近な食べ物として利用されてきたため、種類ごとに名前が付けられたのは間違いない。しかし、キノコの場合、生での保存が効かないことや、数日も経つと別モノのような状態になってしまうことから、同じ状態のものを遠方の人と見比べることが困難だったと考えられる。地域間でキノコの正確な情報が伝わらなかったため、狭い村の中では呼び名が統一されても、離れた地域とは統一できなかったと考えている。

近年は、綺麗なキノコ写真を載せた図鑑やキノコ画像をアップしているHPも増えてきた。キノコ観察会も各地で実施されるようになり、キノコの呼び名も統一されてきている。このことは、キノコを広く知る上で非常に便利で有益なことではあるが、翻って考えてみると、キノコの方言が消えつつあるともいえ、各集落に居たキノコに詳しいおじいさんが居なくなってきたともいえる。あと20年もすれば「"タケ"を採っているのか」と聞かれることもなくなると思うと寂しい気がしている。

この「兵庫のきのこ図鑑」は、兵庫県林業会議発行の『兵庫の林業』に2005年４月から2012年１月まで７年間28回に渡って連載させていただいた「兵庫のきのこ」シリーズを取りまとめたものです。兵庫県内に発生しているキノコ約160種を紹介させていただきました。最後になりましたが、兵庫県林業会議の成田元事務局長、吉田前事務局長、浦杉事務局長には、連載にあたり執筆の遅れや写真の色調整等たいへんご迷惑をお掛けしました。（社）兵庫県治山林道協会の中野元常務、太田常務には、取りまとめにあたり多くのアドバイスをいただき感謝申し上げます。また、キノコの写真を快く提供していただいた平山吉澄氏、鳥越茂氏、斉藤充氏に感謝します。その他多くの方々に最新のキノコ情報を提供していただきました。改めて御礼申し上げます。

2012年６月

著者代表

あ	アイタケ	41
	アカイボカサタケ	30
	アカダマキヌガサタケ	52
	アカツムタケ	26
	アカハツ	44
	アカモミタケ	43
	アカヤマドリ	39
	アシナガイグチ	40
	アシボソニガイグチ	37
	アミタケ	34
	アメリカウラベニイロガワリ	36
	アラゲキクラゲ	53
	アルカリキゾメニガイグチ	37
	イヌセンボンタケ	23
	イボテングタケ	14
	ウコンハシ	42
	ウスキキヌガサタケ	57
	ウスキモリノカサ	22
	ウスタケ	46
	ウスヒラタケ	8
	ウラベニホテイシメジ	31
	ウラムラサキ	10
	オウギタケ	32
	オオイチョウタケ	12
	オオオニテングタケ	18
	オオゴムタケ	54
	オオシロアリタケ	58
	オオシロカラカサタケ	22
	オオセミタケ	56
	オオダイアシベニイグチ	58
	オオムラサキアンズタケ	45
	オオワライタケ	29
	オニフスベ	51
か	カエンタケ	56
	カオリツムタケ	26
	カキノミタケ	54
	カゴタケ	51
	カブラテングタケ	16
	カラカサタケ	22
	カレバハシ	41
	カワラタケ	48
	カンゾウタケ	46
	キアミアシイグチ	36
	キイボカサタケ	30
	キイロイグチ	34
	キクバナイグチ	39
	キクラゲ	53
	キシメジ	11
	キチチタケ	42
	キヌオオフクロタケ	21
	キヒダタケ	34
	キヒラタケ	7
	クサイリハシ	42
	クサウラベニタケ	31
	クチベニタケ	50
	クリタケ	24
	クリフウセンタケ	28
	クロタマゴテングタケ	15
	クロノボリリュウタケ	55
	クロラッパタケ	45
	コウタケ	47
	コガネタケ	23
	コシロオニタケ	21
	コツブタケ	50
	コトヒラシロテングタケ	20
	コフキサルノコシカケ	49
	コンイロイッポンシメジ	32
さ	ササクレシロオニタケ	18
	サマツモドキ	11
	サンコタケ	52
	シイタケ	8
	シャカシメジ	9
	シャグマアミガサタケ	55
	ショウゲンジ	27
	シロイボカサタケ	30
	シロオニタケ	16
	シロテングタケ	20
	スギタケ	26
	スギヒラタケ	12
	スッポンタケ	52
た	ダイダイイグチ	36
	ダイダイガサ	14
	タマゴタケ	15
	タマゴタケモドキ	15
	チシオタケ	13
	チチアワタケ	33
	チチタケ	43
	チャナメツムタケ	27
	チョウジチチタケ	44
	ツキヨタケ	10
	ツチグリ	49
	ツルタケ	18
	トガリアミガサタケ	55
	トキイロヒラタケ	7
	ドクツルタケ	17
	ドクベニタケ	41
な	ナガエノスギタケ	27
	ナメコ	25
	ナラタケ	12
	ナラタケモドキ	12
	ニオイドクツルタケ	17
	ニオイワチチタケ	44
	ニガイグチモドキ	38
	ニガクリタケ	25
	ニセマッタケ	11
	ニワタケ	32
	ヌメリイグチ	33
	ヌメリコウジタケ	35
	ヌメリササタケ	29
は	ハイイロオニタケ	19
	ハイカグラテングタケ	16
	ハタケチャダイゴケ	50
	ハッタケ	44
	ハナイグチ	33
	ハナビラニカワタケ	53
	ハルシメジ	31
	ヒイロタケ	48
	ヒイロチャワンタケ	56
	ヒイロベニヒダタケ	21
	ヒカゲシビレタケ	25
	ヒトクチタケ	47
	ヒメカバイロタケ	14
	ヒメベニテングタケ	17
	ヒラタケ	7
	フクロツルタケ	20
	フチドリツエタケ	13
	ブドウニガイグチ	38
	フモトニガイグチ	38
	ベニイグチ	40
	ベニテングタケ	57
	ベニナギナタタケ	45
	ホウキタケの仲間	46
	ホコリタケ	51
	ホンシメジ	9
ま	マイタケ	48
	マツオウジ	8
	マツタケ	11
	マユハキタケ	54
	マンネンタケ	49
	ミイノモミウラモドキ	30
	ミドリスギタケ	30
	ミドリニガイグチ	37
	ミヤマタマゴタケ	19
	ミヤマベニイグチ	40
	ムキタケ	13
	ムジナタケ	23
	ムラサキアブラシメジモドキ	28
	ムラサキシメジ	10
	ムラサキフウセンタケ	29
	ムラサキヤマドリタケ	35
	ムレオオフウセンタケ	28
	モエギタケ	24
や	ヤグラタケ	9
	ヤシャイグチ	39
	ヤナギマッタケ	24
	ヤマドリタケ	58
	ヤマドリタケモドキ	35
	ヤマブシタケ	47
	ヨソオイツルタケ	19
ら	ルリハッタケ	43

兵庫のきのこ図鑑

発　行：社団法人　兵庫県治山林道協会
神戸市中央区北長狭通5丁目5-18
TEL.078-371-0210　FAX.078-371-6632
http://www.chisanrindou.jp/

発行日：2012年6月
著　者：藤堂千景　正井俊郎　山田裕司
協　力：鳥越　茂　平山吉澄　斉藤　充
印　刷：ウニスガ印刷株式会社